島木赤彦

——修学時代——

宮川康雄

一

島木赤彦の誕生地と誕生日については長く二説があった。しかし誕生地は長野県諏訪郡上諏訪村（現在、諏訪市諏訪）字角間裏であり、誕生日は明治九年十二月十六日であることについてはかつて明証を挙げて説いたことがある。[注] それでこのことについてはここでは再説しない。赤彦の父は塚原浅茅（三十二歳）、母はさい（二十七歳）である。本名の俊彦は父によって命名された。

赤彦が誕生した時の家族は、他に、泰蔵、秀彦、武彦の三人の兄と祖母さよがおり、あわせて七人であった。当時父の浅茅は、上諏訪から三里ほど離れた同じ諏訪郡の豊平村（現在、茅野市豊平）下古田にある古田学校に教員としてつとめていた。

塚原家は、浅茅の書きのこした記録によると、甲州巨摩郡塚原村（現在、山梨県北巨摩郡甲西町）を苗字の地とし、家祖三河守頼泰以来代々武田氏に属したという。武田氏が天正年間に滅亡した後は、寄る辺を頼って隣国の信州諏訪の地に落ち延び、当地の大名諏訪氏に仕えた。諏訪氏が天正十八年武州に移封され、さらに上州総社に転封された際にも随行、諏訪氏が慶長六年に旧領諏訪の地に戻った時にも従って戻り、以後当地に定住することになったのである。その後、寛文十年に咎を蒙って奪禄屏居を命じられるという悲運に遭ったが、ふたたび召出されて明治維新に至った、と浅茅は記している。旧藩時代の塚原家は、諏訪高島藩の分限帳の記録によれば、桶師であり、給米十俵二人扶持を食禄していた。

この塚原家からは宮大工の棟梁として知られた立川家が分家している。すなわち、立川家の初代和四郎冨棟は塚原家が諏訪に移ってからの七代目忠右衛門泰義の次子で、長子が夭折したため家職を嗣ぐべき立場にあったのを、江戸に出て大丸呉服店に奉公し、後幕府の御用大工の棟梁、本所立川通に居を構える立川小兵衛富房の許で修業する機会に恵まれた。技倆儕輩に抜きん出たところから立川姓を許され、職養子となることを懇望されたが、これを辞退して諏訪に帰り、開業した。しかし、彫刻の技術の不足を自覚して、再度出府、中沢五兵衛に宮彫を学んだ。このようにして帰郷後、社寺建築を業とし、別に一家を立てて、諏訪立川家の祖となったのである。

冨棟は、隣国にも活動の範囲を拡大した。就中、幕府直轄の工事であった三河の浅間神社の社殿の建築に際しては、社殿を飾るすべての彫刻の仕事を一手に引受け、二代和四郎冨昌（卍斎）に手伝わせて、三十八年の間この仕事に従事し、ついに完成させた。冨棟はその功績によって内匠の称号を授与され、名工の名をほしいままにした。冨昌から以後の代になると、建築家としてよりも彫刻家として名が聞こえた。冨昌の子の和四郎冨重と専四郎冨種の兄弟など、一家からは代々彫刻の名手があらわれ、立川一門の名声は広く世に知れわたったのである。

この立川家を分家として出したことは、もとより塚原家の誇りとなっていた。赤彦は幼時からこのような家の誉れを繰返して聞かされながら育ったのである。

塚原家は、冨棟が分家したことから、弟の七郎右衛門恭義が嗣いだ。恭義の子には六郎右衛恭隆と七郎右衛門行則の兄弟があった。はじめ恭隆が家督を嗣いだが二十九歳にして早世したので、行則がその跡を嗣ぐことになった。これが赤彦の祖父である。

行則は性豪放で、諏訪の生んだ唯一人の勤王の志士石城東山とは莫逆の友であったという。しかし飲酒を好んで下諏訪宿で遊興に耽り、家産を蕩尽し、その上に親しい友人と伊勢参宮の旅に出て病いを得て帰郷、ついに一子泰蔵を遺したまま、嘉永七年（一八五四）に、三十九歳の若さで歿してしまった。

行則の遺児泰蔵すなわち赤彦の父は、そこで母さよの手一つで育てられた。さよは、藩の御用達上諏訪の金井家の女で、実家の縁者には、平田篤胤の門人で諏訪における国学の第一人者松沢義章がいた。泰蔵は経済的には恵まれない環境にありながらも、それで、自分が義章のような著名な学者と血筋のつながっていることに強い誇りをもちながら成長したのである。

泰蔵は弘化四年（一八四四）四月の生まれで、父の病没した時にはまだかぞえ年十一歳であった。しかしこの年二月には盛吉と改名、藩には十三歳の届を出して家督を嗣いだ。もっとも、家職を継ぐに足る技術は身につけていなかったから、父の弟子であった六右衛門に一時家職をつがせ、家名を保ったのである。

元治元年三月、盛吉は六郎右衛門義寛と改名した。維新後の明治三年、二十七歳の時にさらに浅茅と改名して、以後これを終生の名としたのである。

浅茅は学問を好んだけれども、軽輩の家に生まれたため、藩校長善館に入学して正式に漢学を学ぶことは許されなかったらしい。それで浅茅の漢学の素養は、多く独学によって身につけたものであった。もっとも長善館で開講されるようになった国学についてはこれを学ぶことができた。

浅茅は少年時代に水戸学の影響を受けている。藩校の句読師をつとめていた石城東山に愛され、東山が王政復古の国事に奔走するために、脱藩して江戸に向かったときは、ひとりこれを和田峠の頂上まで見送ったという。浅茅が維新後の廃藩置県で家禄を失ってから神職となり、長く小学校の教員をつとめて退職したあとも再び神職となって生涯をおえたのは、諏訪大社が鎮座し、敬神の心のあつい人びとの住む諏訪の地に生まれたということもあるが、同時に、それには上記のような背景もあったのである。

維新後の明治六年四月、浅茅は柳川学校学事係を命じられ、次いで、七年一月、諏訪郡泉野村戸長に任命された。しかし浅茅は、多忙を理由として即日戸長の職を辞し、教育に専念する道を選んだ。これは自分が政治よりも教育の仕事に向いていることを自覚していたからであろう。

謹厳実直の人であった浅茅は、一方では詩歌を愛する文雅の人であり、詩歌に寄せた関心も小さいものではなかった。作歌を趣味とし、若い頃から折に触れて詠んだ和歌は相当の量にのぼっている。赤彦の歌人としての資質の一半は、この父から受け継いだものといえるであろう。

赤彦の生母さいは諏訪郡米沢村（現在、茅野市米沢）北大塩の小松久助の次女として、嘉永三年（一八五〇）に生まれた。慶応三年に十七歳で浅茅に嫁した。浅茅との間に五男一女を設けたが、明治十

八年四月、赤彦のかぞえ年十歳の時に死去した。前年の四月に五男文夫（夭折）を生んだあと産後の肥立ちが悪かったためと伝えられている。赤彦は母と早くに死別したので、成長してからもその記憶をほとんどのこしておらず、生母から何を受け継いだのかについては、にわかに言うことができない。しかし性格の陽性であったところや政治好きであったというような点は多分母方の血筋に負うものであろう。

塚原家は赤彦の生まれた翌年明治十年八月に、上諏訪の城下を離れて、浅茅の勤務地である諏訪郡豊平村の下古田に転居した。これは、浅茅が上諏訪の住居から徒歩で通勤していたのを、長野県からの通達により現地居住が義務づけられたため、一家を挙げて移住したものである。以後、下古田の地は、塚原家の永住の地となったのである。

二

豊平村は長野県と山梨県との間にそそり立つ八ヶ岳の北側の裾野に散在する寒村の一つである。この地方は、通称山浦と呼ばれ、諏訪のなかでもとりわけ気候の酷薄の地である。

塚原家の住居は、契約で豊平村が提供することに決まっており、はじめ古田学校の校舎の一角がそれにあてられた。後に浅茅の再婚に際して、近くの真徳寺の隠宅も借り受けた。

村から受ける浅茅の俸給は、さして額の多いものではなかった。移住した当時、七人であった家族は、明治十三年十月に赤彦の下に妹の田鶴が生まれたので、八人となり、家計はいっそう厳しくなった。

このように窮乏の生活であったが、しかし、浅茅は武家の出であり、一般の村民に比べるとはるかに豊かな教養を身につけていた上に、人徳にすぐれていたところから、村民の尊敬を受け、その信望を一身にあつめた。生計は苦しくとも、このため、塚原家の地域における地位はひときわ高いところにあったのである。このような家の子として、赤彦は、幼少年期を山浦の自然の中で過ごした。

少年時代の赤彦については、強情で、非常な腕白者であったと伝えられている。明治十四年四月にかぞえ年六歳で古田学校に入学したが、年齢を加えるにつれて腕白がひどくなり、野放図で奔放な行動には親も手を焼くほどであったという。

しかし、明治十八年四月、かぞえ年十歳になった時に生母さいの死に遭ったことは、赤彦の胸に深刻な翳をおとした。「十歳にして世の悲しみを知れり。予が歴史はそこに第一頁を書けり。」「第一頁はやがて予が今までの全頁を貫けりき。」と、赤彦は二十六年後の明治四十四年に当時『南信日日新聞』に連載していた「日曜一信」の中で記している。赤彦は、このとき、自分の生の根底にあるものは「寂」であり、その「寂」に根ざして生きなければならないことを深く自覚することになるのである。

赤彦は生母を失った翌年の明治十九年三月に古田学校を卒業、四月になると豊平村の南大塩高等小学校に進学した。この年の暮には父の浅茅が上諏訪の藤森松之進の長女み戎（安政三年生、三十二歳）を後妻として迎えている。藤森家も旧諏訪高島藩に仕えた家筋で、浅茅と同様にみ戎も再婚であった。浅茅が先妻の死後年を経ずして後妻を娶ることになったのは、家族に多勢の子供がおり、幼女の田鶴もかかえているので、主婦がいなくては一家の維持がきわめて困難であったからであろう。

赤彦にとって幸いであったのは、み戎が心優しい女性であり、赤彦たち義理の子を自分の生んだ子供と同様に、心から深く愛してく

れたことである。生母を失いながらも赤彦が少しもいじけることなく成長し、十分に個性を伸ばすことができたのは、この継母の人柄に負うところが大きい。

南大塩高等小学校をおえた赤彦は、上諏訪に出て、諏訪高等小学校の三学年に編入学した。南大塩高等小学校の二年課程をおえたあと進学するとなれば、諏訪郡内では上諏訪の郡立諏訪高等小学校が一校あるだけであったのである。郡の中心地上諏訪の町に出た赤彦は、祖母の実家、岡村の金井家に寄寓し、従前から在学していた上諏訪の生徒や、赤彦と同じく新たに郡内各地の小学校から進学してきた少年たちに交じり、彼らと机を並べて勉強することになった。

諏訪高等小学校に在学した頃の赤彦は、腕白がいっそう募ってきたらしい。同級生であった三沢精英は、赤彦が歿した後、『信濃教育』の「久保田俊彦氏追悼号」に寄せた「青年時代の彼」と題する文章の中で、「小学生の塚原俊彦は、今もアリアリ見えるが、手も足も鳥のやうに真っ黒で、膝から上の着物をきて、歯のかけた下駄で石を蹴りながら、『何だこの野郎』と目をクルクルさせて、厚い唇をつき出す鼻垂れ子僧振りは一異彩であった。」と記している。赤彦の腕白振りはどの教師の手にも負えぬほどで、「『手の中にまるめ込む』といふことが、到底できなかった」、という。けれども、「ただ三輪三吉といふ熱血男子の先生があって、この先生が涙を眼に一ぱいためて、何やら訓戒するときは、俊彦も小さくなって、妙に悄気返ったり、両腕を胸にくんで、顔一ぱいに涙を流してゐるやうなこともあった。」と記している。つまり、赤彦は、「これを『心服』させることはできるけれども、『威服』させることはできない」少年であったというのである。三沢は「これは俊彦の「一生を通じてその人格練磨の基礎をなしてゐはせまいかと思ふ。」と総括しているけれども、最晩年まで交友を続けた親友のことばであるだけに、傾聴すべきものであるように思われる。

赤彦は明治二十三年三月に諏訪高等小学校を卒業すると、育英会に入り、さらに半年間、勉学を続けることになった。育英会は、高等小学校の補習科で、後に、これがもとになって諏訪中学校（現在の県立諏訪清陵高等学校）が設立されたのである。

その後赤彦は、十月から郡内の泉野尋常小学校に授業生として勤務することになった。授業生は当時の制度による小学校の補助教員である。月給は二円三十銭であった。

翌明治二十四年一月に三兄武彦の死に遭った。武彦の死因は肺結核で、長く病床に臥し、十九歳で早世したのであった。

赤彦はこの年五月に泉野小学校の授業生の職を退いたが、十二月には、再び豊平村の隣村玉川村の玉川尋常小学校で授業生の職についた。翌年四月にさらに、今は南大塩尋常小学校古田支校と改称していた旧古田学校に移って授業生を務めているが、これは赤彦の行動があまりに奔放に過ぎるのを浅茅が心配して手もとに呼び寄せたものであると言う。以後は、父の監督と指導とを受けながら、上級学校に進学するために、受験準備の勉強を続けることになった。

少年時代の赤彦の志望は、軍人となることであった。軽輩とはいえ、旧藩時代には武家であった家の子として生まれた少年が、将来軍人となって出世することを夢みたのは、当時としては、ごく自然のことであった。赤彦が青年期を迎えていた明治二十六年には、旧時代隣藩であった松本藩の下級武士の家に生まれた福島安正少佐が、ドイツからの帰国に際して単騎シベリヤ大陸を横断し、世界に勇名を轟かせているし、また、幸田露伴の兄郡司成忠大尉も同志と共に北千島を探険し、国内を湧かせていたのである。赤彦はこのよ

うな時勢のなかで、自分の夢を実現しようとして、雪中自宅近くの小泉山に裸足で登るなど、身体の鍛錬に励んだのである。

しかし一方、赤彦の中には、これ以前から、詩歌への関心が芽生えていた。諏訪高等小学校に在学していた明治二十二年、十四歳の時に、父にせがんで少年向けの投書雑誌『少年園』（明治二一・一一創刊）を購ってもらい、耽読している。同年八月に『少年園』から分かれて『少年文庫』（明治二八・九『文庫』と誌名変更）が出ると、これも手に入れて読み耽った。作歌もほどなく始めたらしい。

赤彦に作歌の手ほどきをしたのは祖母のさよであったと伝えられている。やがて赤彦は、郷里の友人永田市右衛門や長田幸治らと和歌や俳句を作っては見せ合うのを楽しみにするようになった。そのうち『少年園』や『少年文庫』に自分も投稿を試みた。

雑誌に載った赤彦の最初の作品は、明治二十五年二月発行の『少年文庫』第七巻第一号に掲載されている次の三首の歌であるらしい。かぞえ十七歳の年のことである。

初春祝君

春草の萠出るよりもいと繁く君が幸こそ栄え行らめ

元旦望富士山

新玉の光を添へて今朝よりは照る日のどけき富士の柴山

立　志

的きめていでや放たん梓弓引きて帰らぬ心契ひて

作者名は一首めと三首めが本名の塚原俊彦、二首めは塚原俊雄として出ている。しかし二首めの俊雄というのは誤植で、ここも俊彦とあるべきところかも知れない。いずれの歌も稚拙ではあるものの、多少詠み習ったふうの認められるのは、赤彦がすでにある程度の実作の経験を積んでいたことを示すものであろう。

明治二十六年になると、新体詩も作って『少年文庫』その他の同種の雑誌に投稿するまでになった。はじめ本名を用いていたのをこの年の半ば頃からは伏竜、伏竜樵夫の筆名をもって投稿しており、詩歌への情熱がいよいよ高まってきていることを推測させる。伏竜、伏竜樵夫の筆名は、赤彦の将来への野心をあらわすものにちがいない。

三

軍人志望と詩歌への熱中のなかで、赤彦は、明治二十七年の春、県都の長野に出て、長野県尋常師範学校に進学することになった。県立松本中学校に進学することを希望していたけれども、父の俸給では学費の負担に耐えないので、すべてが官費によって賄われる師範学校への進学に志望を変更することを余儀なくされたのである。浅茅は師範学校への進学を赤彦が承知した時には、わが子ながらに手をついて礼を述べたという。

師範学校は、いうまでもなく、明治維新の変革期を経て新しい時代に入ったわが国が、列強諸国に追いつくことを目標として欧米に倣って諸制度の整備をすすめる中で、教育の近代化をはかるべく国家的要請にもとづいて設置された小学校教員の養成機関である。師範学校生徒の生活は、従って、教場においても、また全寮制の寄宿舎の内においても、軍律的な厳しい支配の下に統制されていた。

そのような厳しい拘束に耐えることができなかった赤彦は、師範学校入学後もしばしば規律を破り、生来の奔放さを発揮した。このため学業成績は、常に下位を低迷し、卒業時の席次もようやく最下

位を免れるという有様であった。

赤彦はしかし、校長正木直太郎をはじめとして、浅井冽、高橋白山ら県内の旧藩校出身の気骨ある教師の薫陶を受ける一方、ヘルバルトの教育学など新たに西洋から舶載された教育学説を学び、また、最上級の四年生に進んだ時には附属小学校における一年間の長期にわたる教育実習の修練を実地に積んで、卒業後教育の現場において指導的立場に身をおく教員としての基礎をこの時期に十分に築いた。特に師範学校在学の四年間に、全県下から集っている同世代の俊秀との交友を通じて得たものは、生涯を通ずる貴重な財産となった。

長野師範で同級生となったのは、伊藤長七、矢島音次、大森忠三、太田貞一ら三十余名である。入学当時の感激を太田貞一すなわち太田水穂（みづほのやと号した）は、「僕等は小学校を出て、或るものは農業を手伝ひ、或るものは授業生となって、半ば粗朴なる読書にしたしみながら、二三年を経過して、やうやくこの学校に入ることが出来たのである。上級のものから伝へられ、教へられるすべての事が、若い僕たちの心に燃えつくやうに受け入れられ、さうしてそれが各の性格の隠れたものを引き出す、或ひは新に胚種となって植ゑつけられて行くのである。眼にも耳にも光と色との眩ゆいほどの擦触を受けて半ばは怖るゝものゝ如く、また半ばは満ち足りるものゝ如く、悲しみ且つ愛へつゝ、ひたすら伸びよう伸びようとする青草の芽のやうなのが、当時の大森であり、矢島であり、塚原であり、僕であった。」（「亡友旧友」大正一五・四）と回想している。いかに新鮮な感激をもって彼らが師範生の生活を始めたかが知られるであろう。

赤彦が師範学校に入学した明治二十七年の夏になると、朝鮮において東学党の指導による農民暴動が発生し、鎮圧のために清国が出兵したのを機としてわが国も軍隊を派遣、ここに両国の軍隊が衝突して日清戦争が始まった。この戦争は翌年の春には日本の勝利のうちに終結し、下関において講和条約の調印をみたが、戦勝によって国民の間におこってきたのは、日本人としての国民的自覚である。この潮流に乗って文運も興隆をきたした。明治二十八年に入ると、『文章倶楽部』『太陽』『帝国文学』『青年文』などの雑誌が相継いで創刊され、青年たちに強烈な刺激を与えた。

このような時流の中で師範生としての一年間の生活を送った赤彦は、二年生に進級する頃になると、十名ほどの仲間と共に、新たな活動を始めた。その活動は、同級生の間に一種の「風気」をかもすことになった。水穂の「亡友旧友」によれば、従来の師範学校教育が「形式的智才主義」もしくは「実際主義—術万能の教育」というべきものであったのに対して、これに盲従することを肯んぜず、「人文的傾向」とも「理想的性情主義の希求」ともいうべきものをあらわに示すようになったのである。この「風気」は、やがて周辺の人びとにも浸透していき、三年生に進む頃には、ついに「全く全級を蔽ひ、さらに全校をあふらすほどの勢ひ」になったというのである。

この流れは水穂によれば、三つに分れていた。「山沢志士の硬的精神」「文学的精神の流れ」「哲学的傾向の流統」の三である。一年上級の岡村千馬太、同級の大森忠三は第一の流れの精神を代表する者であり、中途で退学した三沢精英も志はここにあった。矢島音次と若月岩吉とは第三の流れの潮筋の案内者として立つ者であった。水穂と赤彦とはそして、第二の流れを代表する者となったのである。むろんこれらの流れは交流し、影響を与え合った。岡村千馬

太は赤彦や水穂が詩文趣味に耽るのを憂え、しばしば忠告を与えた。赤彦が後年に至っても文弱に流れることのないよう自戒していたのは、この岡村や大森の忠告を忘れなかったためである。

赤彦が愛読した書物は、思想の方面では、三宅雪嶺の『真善美日本人』（明治二四・三刊）、志賀重昂の『日本風景論』（明治二七・一〇刊）、徳富蘇峯の著述など、多くは国粋主義的傾向を帯びた著作物であった。新聞『日本』によって詩歌の革新運動を押し進めていた正岡子規のもとにやがて参ずることになる赤彦の、子規との思想上の親近性は、すでにこの読書傾向のなかに明らかに認めることができる。文芸方面で愛読したのは、『白氏文集』や『逍遥遺稿』であった。『白氏文集』は、三年生の春に町の古本屋から高い代金を支払って購ったものである。『逍遥遺稿』は、早世の漢詩人逍遥中野重太郎の遺稿集であり、情熱あふれる浪漫的詩情によって青年たちの心を魅了していた。この書物は、逍遥歿後満一年の明治二十八年十一月に刊行されたものであるが、赤彦は翌二十九年の三年生の夏に大森忠三が東京の発行者からわざわざ取り寄せたのを借覧し、耽読したのである。師範学校に在学している間に赤彦は万葉集全巻も読了したと伝えられているけれども、これについては、明証を見出し難い。国語の授業で学習したのを機として多少愛読したという程度にとどまったのではなかろうか。

赤彦の文学上の成長に影響を及ぼしたものとしては、まず入学当時最上級生であった勝家貞一郎の名前を挙げなくてはならない。勝家は、貞文の筆名を用い、落合直文のあさ香社に属して活動しており、全校に歌人としての名を知られていたのである。赤彦はしかし勝家が卒業し、二年生に進級すると、一年上級の福沢悦三郎（天真）と親しく交わり、その影響を強く受けることになる。福沢との交流を通して赤彦は、ミルトン、テニソン、シェークスピアなど、いまだかつて耳にしたことのない多くの西洋の詩人の名を知った。福沢の啓発によって田園詩人宮崎湖処子の詩に接した赤彦は、湖処子に近づいていくことになる。湖処子の浪漫的な田園憧憬の文学は、農村社会に育ち、また生来、感傷的な性情の持主であった赤彦の心を強く惹きつけたのである。

花　の　木

花にちぎりし吾が友は
花よりさきにちりにけり
ちりたる友のためにとて
ここにうつしし花の木よ

手向くるわれもつひに又
汝れが木かげに眠りなば
並べる墓をいく春も
かはらぬ笑みに守れかし

汝れが色香をしるものは
眠れる友と我れなれど
高くさやけきわが胸を
けがさぬものも汝れならん

かりそめ人のたちよりて
汝れが一枝を手折りなば
手折る袂のひまとめて
汝れも散れかしこの墓に

この詩は、水穂によれば、「やや作家らしい彼れに生長した跡をもっとも多く反映するものとして、赤彦の創作年表の上に特記すべきもの」、である。そして、この詩には「宮崎湖処子の新体詩の調子が或る程度まで影響してゐる。」（「亡友旧友」）と水穂はいう。三年生に進級した明治二十九年の春に、『文学界』に掲載された作品である。

詩風の変化は、筆名の上にも反映し、赤彦は従前の伏竜の号を廃して、この頃から二水軒という瀟洒な号を用いるようになった。

四

さて、明治二十九年の初秋の一日、寄宿舎にもたらされた『文学界』四五号に掲載されていた島崎藤村の新体詩に触れることによって、赤彦は、さらに新しい詩の世界に目を開かれることになる。同誌に発表された藤村の詩は、「草影虫語」を総題とする七篇の作である。

流　星

門にたち出でたゞひとり
人待ち顔のさみしさに
ゆふべの空をながむれば
雲の宿りも捨てはてゝ
何をかこひし人の世に
流れて落つる星一つ

いま一篇のみを引いたが、水穂はこれらの詩にはじめて接した時の驚きを、「湖処子の新体詩、武島羽衣、塩井雨江、落合、与謝野というやうな人たちの単純な田園詩、今様めきた叙情詩などに慣れてきた従来の感覚に、藤村詩のこの新しい声調はたゞ驚異であるより外無かった。」と記している。また、「藤村子のもたらした詩の響きは高さと深さと、大胆さとに於て、全く僕たちの詩の概念を崩壊さすほどのものであった。」（「亡友旧友」）とも書いている。その驚きがいかに大きなものであったかが推測されるのである。

赤彦や水穂はまた続いて『文学界』四八号に載った藤村の「うすごほり」と題する六篇の詩にも新鮮な感動を味わった。

赤彦がこうして藤村詩への傾倒を深めていくにつれて、藤村の詩が赤彦の新体詩に強い影響を及ぼすのは当然の道理である。その影響がいちじるしく現れるのはしかし、赤彦が師範学校を卒業した後のことである。それでここではその例については触れない。

師範学校に在学していた頃の赤彦が最も情熱を注いだのは、新体詩の創作であった。太田水穂もこのことを「学窓の余暇君は多く新体詩を稿し、僕は短歌及び文章を作した」（「亡友旧友」）と記している。二年生の頃、同級生の間で『二葉草』という廻覧雑誌を作ったが、赤彦は、これにも殆ど毎号にわたって新体詩を書いた。『文庫』『青年文』『早稲田文学』その他の文芸雑誌に赤彦が発表した新体詩の中には、「南の洋」（『青年文』明治二九・五）のように、八十八連三百五十四行に及ぶ大作もあり、また「秋風曲」（『文庫』明治三〇・六）のように、それをさらに上まわる長篇ものこされている。赤彦がいかに多くの精力を新体詩の創作に費したかがうかがわれるのである。明治三十一年三月に『文庫』誌上に掲載された「春の月」と題する新体詩は、河井酔茗、伊良子清白、横瀬夜雨、木船和郷の四人と合作したものであり、文庫派詩人との交際も、相当広範囲にわたっていたことが推測される。

新体詩の創作に当っては、赤彦は、七五調、五七調などの一般的な調子の作品だけではなく、「蒼海遺珠」（明治三一）「市隠」（同上）など五五調のものや、「衣掛柳」（明治三一）などの七七調のものも作っている。新味を出そうとして調子の上でも変化を試みているのである。

赤彦の新体詩の特色は、農村生活に取材した作品が多いことで、このことは、「田家夏」（明治二七）「帰郷」（明治二八）「ひなの夕暮」（同上）「桃花の里」（明治二九）「村里の祝日」（同上）などの題名をみても明瞭である。そして農村の生活の中における親

子、兄弟などの愛情が好んで歌われていることもすでに認められているところである。右に挙げた詩の多くもそうであるが、「爺」（明治二八）「幼弟」（同上）などの作品も同じである。これらは文庫派の詩人の作品にある程度共通して認められるところであるとはいえ、赤彦において際立っているといえる。

赤彦の新体詩に色濃くあらわれているのは、孤児の悲しみとでもいうべき感情である。たとえば、赤彦は、明治二十九年十一月発行の『文庫』に発表した「夕時雨―従弟なりし少年にあひて―」と題する詩で次のように歌っている。

君もわが身も親なし子
はからずここに出であひて
さびしき笑みに見かはしし
われらが胸のかよはさよ

むかしはすべて語りづな
涙のたねとなりやせむ
血をわけ合ひしみなし子が
たまさかあひて泣きもせば
われらが仲は遂にまた
笑みてふことのあらざらむ（後略）

また、明治三十年五月の『文庫』に載せた、

早くわが家に行きませや
かへりませやと母上の
み手にすがりて聞ゆるを
いらへまさぬは何ゆゑぞ

から始まり、

親におくれしみなし子が
こよひも夢になきけるが
迚も甲斐なき母上が
かへりまさじとのたまひし
今の一こゑなどてかく
心にしみてのこるらむ

におわる「迷ひ」などにしても同様である。「亡き父」（明治二七）「紙屑ひろひ」（明治二八）「青き月」（同上）などの作品にも親なし子の悲哀の情があふれている。このようなモチーフが幼年期に生母と死別した自身の不幸な体験に由来するものであることは多言を要しないであろう。

赤彦の新体詩の中には漢詩文の詞句に典拠をもつものも目につく。「秋風曲」などにはこれがいちじるしい。たとえば、『史記』の「刺客伝」の「風蕭々兮易水寒、壮士一去兮不復還」を踏まえた

蕭々の風霜をふき
稜々の胡馬死地になき
易水の波きしをうてば
かへらぬ壮士月になく

とか、唐代の詩人劉廷芝の楽府体の詩「代悲白頭翁」の「洛陽城東桃里花、飛来飛去落誰家、洛陽女児惜顔色、行逢落花長嘆息」を新体詩に翻訳したともいうべき

あはれ洛陽春はやき
桃里のかぜもむかしより
城東子女の怨みあり
されば紅顔いくときか
落花の風にむかふべき

とかは、その代表例である。

五

上述のように新体詩の創作に情熱を傾けていた赤彦も、和歌への関心を失っていたわけではない。師範在学期の赤彦の和歌で旧版の『赤彦全集』に収められたものは数が少なかった。しかし昭和四十三年から四十五年にかけて再刊された新版の全集では、自筆稿本『手植の千くさ』所収の歌が増補されたことによって、この時期の作歌数も相当の量にのぼることが明らかになった。すなわち、三冊の稿本のうち、「其一園」には明治二十七年の春から翌二十八年の四月までの作が、「其二園」にはそれ以後明治二十九年四月までの作が、「其三園」にはこれ以後の作が収録されており、師範在学期を通じて、赤彦が継続して歌作に励んだことを証しているのである。

収録歌数の多寡をみると、明治二十八年が最も多く、二十九年がこれに次ぎ、二十七年と三十年は、二十九年より少なく、その量は同じくらいである。赤彦の作歌欲が高潮したのは、これによって推測すると、明治二十八年から二十九年にかけてであったと考えられる。この辺りを境にして、赤彦は、和歌から新体詩へと情熱の対象を移したのであろう。

いまいくらか和歌の変化の跡をたどってみる。師範学校に入学した明治二十七年の作品は、たとえば次のようなものであった。

わがやどを覗きかほなるほたる哉さし忘れたる窓に入り来て　（窓螢）

ことしとてふみならはししあさ露の身にしみそめて秋はたちけり　（立秋）

さらしなや姨捨山に小夜ふけてかたむく月に衣うつなり　（即詠）

いずれも月並歌の発想を出ていない。

この年八月に日清戦争が始まり、馬の産地である郷里の山浦地方では、多数の飼馬が軍馬として徴発を受けた。また、同年九月には大本営が東京から広島にすすめられた。

から山や月かげしろき霜の上をいななき進めやまと春駒
みみづからみほことらしていでたえす大御心はいふもかしこき
みいくらのもとゐうつしし広島はひろきいさほの名をもおひたり

このような歌は、当時の赤彦における素朴な感情の表出であろう。むろん、作品として高い評価を与えられるものではない。

二年生に進級した明治二十八年になると、観察が細やかになり、

調子にも張りの出てきたことが認められる。

にはとりのこゑもとなりにきこえつつさみだれはれて日はいでにけり　（五月雨晴）

野も山もおなじみどりに雨はれてあさ日すずしくさしそめにけり　（同上）

夏のよの月まち居ればのきのはに先づ星みえてとぶ螢哉　（螢）

日清戦争は、日本の勝利のうちにおわった。天皇は、五月三十日、広島から東京に還御になられた。その報道を聞いて赤彦は

もろこしのはてまではれし大空をわたる日影のまばゆくもあるか

と詠んでいる。また、戦勝品の煙管を目にして、「分捕品のきせるをみて」と題して

このつつをふきしときには己れをもけぶりにせんとおもはざりけん

いたづらに大きくありてから国はきせるまでこそおろかなりけれ

のような歌も作っている。これらの歌ももちろんすぐれているとはいえない。

これがしかし、歌作への情熱が最高潮に達した三年生の頃の作になると、

千曲川きしの青柳いろそひて白帆すずしくなれる頃かな

ところどころ苗代小田の水みえて月ある夜半に蛙なくなり

のごとく、措辞が巧みになり、歌の調子も会得してきたことがかなり明瞭になる。

玉だれをすこしかすめて蓮葉にさはらぬほどの池の夕かぜ　（夏夕風）

花すすき萩女郎花さまざまに手折りて居れば野辺暮れんとす　（偶詠）

これらの作では、写実味も加わり、新たな抒情の芽ぐみ初めてきたことが認められる。

師範学校在学期における和歌の収穫は、四年生になった明治三十年の夏に、夏休みを利用して同級生の大森忠三、清水謹治（中途帰郷）と共に九州に旅行した折の旅中吟において認められよう。この旅は、直江津から敦賀に至る日本海の船上で、「信濃路の青葉をいでて海の上に歌ひろはむとおもふ旅哉」と詠んでいることからも知られるように、赤彦としては歌作を目的としたものであった。

信のぢはまどほになりぬ近江のや旅にしてきく山ほととぎす

この歌は、詞書に、「旧都に詩人伊良子氏を訪ふ。席上山ほととぎすの題を得」とあり、京都で文庫派の詩友伊良子清白と会い、語り合った際に詠んだものである。題詠であるけれども、しかし、この歌には、単なる題詠歌の発想をこえた旅の実感がこもっている。

秀作とはいい難いにしても、これまでの作に比べれば、新しいものが加わっているようである。遠く旅に出て、自然の景観に接することによって、赤彦は題詠的発想から解き放たれようとしているのである。旅から帰って後、旅中の作品をあつめて詩歌集『西水行吟』を編んでいるが、師範在学期の歌は、この集によって掉尾を飾ることができたともいえるであろう。『手植の千くさ』のごとき歌集を編んだのも多分同時期である。赤彦は社会に出るに先立ち、師範生時代の文芸活動に一応のしめくくりをつけるべく、これらの集をまとめたのである。

師範生時代の赤彦は、その精力の大部分を、すでに述べたように、詩歌の創作に注いだ。実りは少なかったけれども、しかし、この四年の間に赤彦は情熱を燃やし、悔いのない青春を送ることができた。生涯の礎石は、この四年間の生活によって築かれたといってよいのである。

明治三十一年の三月、赤彦は長野県尋常師範学校を卒業すると、県内の北安曇郡池田尋常高等小学校（六月一日池田会染尋常高等小学校と校名変更）に赴任することになる。これ以前、三年生のおわりに近く、明治二十九年の冬を迎える頃には赤彦の身の上にはすでに大きな変化がおとずれていた。郷里諏訪郡の下諏訪町高木の久保田家に養嗣子として入る縁談がまとまり、赤彦は、同年十二月に父の浅茅に連れられて久保田家を訪れ、諏訪地方の婚姻習俗である「出入ぞめ」をすませ、久保田家の当主政信の長女うたとの間に仮祝言を挙げていたのである。赤彦は師範を卒業すると、正式に久保田家に入籍、塚原俊彦から久保田俊彦と改名して、教員としての一歩を踏み出すのである。

以上のごとくにして、赤彦の修学時代はここにおわりを告げたのであった。

〔付記〕本稿は旧稿（「島木赤彦」〔日本歌人講座第七巻所収　北住敏夫と共同執筆　昭和三六・二〕・「島木赤彦論—習作期の考察—」〔『可里婆彌』第三号　昭和三八・一二〕）の一部を踏まえ、誤りを訂正すると共に、その後の調査によって得た資料をおおはばに増補し、赤彦の修学時代について改めて考察を試みたものである。

（注）「島木赤彦伝記上の問題——その出生日、出生地をめぐって」（信州大学人文学部『人文科学論集』第七号　昭和四八・三）